

1 事業名  
平成28年度 教育事業 「体験の風をおこそう」運動協賛事業  
さんりく体験！発見隊

2 趣旨（事業の目的）

東日本大震災から5年が経過し、被災地も徐々にではあるが復興に向かっていく。震災を「風化させない」「忘れない」ために、岩手県の将来を担う児童生徒たちが、被災地を訪問し、沿岸地域の人々と自然体験活動を通して触れ合う中で、被災地復興の現状を理解し、復興支援の一役を担う意識を高める。

3 期日 平成28年7月16日（土）～18日（月） 2泊3日

4 参加者 岩手県内の小学5年生から中学2年生 29名

5 共催 みちのく「体験の風をおこそう」運動推進協議会

6 連携・協力 岩手県立県南青少年の家 岩手県立陸中海岸青少年の家  
宮古観光文化交流協会 宮古市役所田老公民館  
NPO法人 体験村・たのはたネットワーク

7 内容

(1) 日程

【1日目 7月16日（土）】

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
受付・開会式	岩手山青少年交流の家 → 大槌町 【バス移動】		昼食	荒神海水浴場 散策	入所式	震災の話	夕食・ 休憩	クラフト作成 ふりかえり	入浴・ 就寝準備	就寝				

【2日目 7月17日（日）】

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
朝食 荷物整理	陸中海岸 青少年の家 → 宮古市 【バス移動】	三陸 復興 国立 公園	学ぶ防災 田老地区	昼食	バス移動	田野畑村 民泊体験										

【3日目 7月18日（月）】

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
田野畑村 民泊体験	移動	サツパ船 体験・ 交流会	昼食	田野畑村 → 岩手山青少年交流の家 【バス移動】		閉会式				

(2) 講師及び指導者

岩手県立陸中海岸青少年の家	所長	菊池 啓子 氏
岩手県立県南青少年の家	指導員	中村 和宏 氏
NPO法人 体験村・たのはたネットワーク	理事長	道合 勇一 氏
国立岩手山青少年交流の家	所長	松田 栄二
国立岩手山青少年交流の家	主任企画指導専門職	桑原 玲子
国立岩手山青少年交流の家	副主任企画指導専門職	中田 春輝
国立岩手山青少年交流の家	企画指導専門職	鎌田 信浩
国立岩手山青少年交流の家	事業推進係	中野 健二
国立岩手山青少年交流の家	事業推進係	高橋 知也
指導補助		法人ボランティア（5名）

### (3) 企画のポイント

本年度の国立青少年教育振興機構における地域力向上事業として、岩手県立県南青少年の家と検討委員会を組織し、企画段階から連携して地域の教育資源を生かすプログラムを検討した。検討委員会で協議した内容をもとに、野外活動や地域の方々との交流を通じて被災の状況や復興の様子を感じ取れるように、担当者は事前に現地へ足を運び、活動場所や連携先の検討を行った。内容については、被災の様子や復興状況について地域の実情を知り、震災を乗り越え、復興に向かっていく前向きな状況を感じとれるものに重点を置いた。

### (4) 広報のポイント

盛岡市、滝沢市、八幡平市、雫石町、花巻市の小中学校に向けて、印刷所に発注した約 20,000 枚のチラシを配布するとともに、本施設のホームページを活用し、幅広く企画の周知を行った。また「岩手日報」に参加者募集の記事が掲載され、岩手全県下に企画事業について周知することができた。

### (5) 運営のポイント

参加者が被災の状況や復興の様子を感じとれるように、実際に現地へ行き、見たり、ふれたりする活動を取り入れた。併せて、震災に関わる体験談や語り部によるガイドを聞くことにより、震災当時の様子と5年経った被災地の現状を重ね合わせ、これからの自分に何ができるかを気づかせていきたいと考えた。

1日目は、荒神海水浴場で散策をしながらマリングラスや貝殻を拾い、クリアキャンドル作成の材料とした。初日の宿泊施設の岩手県立陸中海岸青少年の家では、所長の菊池 啓子 氏から大槌小学校在職中に体験した「震災の話」を伺うことで、震災当時の状況や被災した子どもたちや家族の様子について理解を深めた。

2日目は、三陸復興国立公園 震災メモリアルパーク中の浜 へ行き、震災遺構や津波の高さを体感する丘を散策した。また田老地区の「学ぶ防災」では、実際に防潮堤に上がり、語り部から震災時の様子や町の現状について話を聞いたり、津波のビデオを視聴したりすることで、改めて津波の恐さを実感することができた。2日目の宿泊は田野畑村において民泊体験を行った。民泊では9つの受入家庭に分かれ、漁業体験や食事の手伝い等をとおして、各家庭で交流を深めた。

3日目は民泊の受入家庭と別れ、サップ船で北山崎の岩穴を巡る乗船体験をした。その後、乗船したサップ船の船頭さんと交流会を行い、漁師の仕事のことや乗船の感想、震災のときの様子などの話をとおして、互いの思いを伝え合った。

## 8 成果とその普及

参加者の教育事業全体に関する満足度・プログラムに関する満足度は共に 100%であり、震災に関する学習に積極的に取り組みたいという気持ちが表れていた。参加者からは「津波が恐ろしいことを改めて知った。これからも忘れないでいたい。」「どれだけ被災地の方々が辛い思いをしてきたのか知ることができた。これからは復興のためになるように積極的に関わっていきたい。」「津波の話は学校でも聞いたが、それよりもっとくわしく、大変な思いをしたということがわかった。なにかの助けになりたいと思った。」という感想が聞かれた。岩手県の内陸の児童生徒が震災時の沿岸部の様子を知ることと、復興の途上にある現在を見ることで、同じ地域としての一体感を持ち、実情を広く伝えていくことに期待ができる。また、県立施設や他団体のもつ地域の教育資源を活用することで、沿岸地域の支援につながった。今後は、さらに他施設・他団体との連携の拡充を図り、2泊3日で小学校高学年に向けた震災学習のモデルケースとして、県内の公立の青少年教育施設と連携を広げ、普及を目指し取り組んでいきたい。

## 9 今後の課題

所外での活動が中心となるため、安全管理が重要であると感じた。事故や怪我に依りて、保護者への連絡や病院の手配など、迅速に対応できる体制を構築していく。また、今回、参加者が互いに体験したことについて話し合う時間を十分にもうけることができなかった。参加者が学習・体験したことについて、参加者同士が震災や復興について意見交換をする場面を作ることにより、今後の自分ができることへの理解や行動につながると感じた。



震災時の様子を知り，被災した方々に思いを馳せる



震災遺構から津波の恐ろしさを感じる



民泊先で夕飯の手伝いをする参加者